

命ある日

幸福にもいろいろな形があり、価値観がある。ある人は、地位や名誉・財産を幸福と思い、他と比べ勝っていることを幸せと感じる。ある人は自分の幸せを、分け与えることで幸福を感じ、又、ある人は、他に捧げ尽くすことに無情の喜びを感じる。

これは、心の低さ、精神性の高さ、その段階が求める幸福の形を表しているのかも知れない。

この作品の登場人物は、それぞれの幸福の形・価値観を探りつつ、それがどうしても相手と分かち合えない事に悩みながら、自身の幸せを見つけていくのだが、昭和15年に自身の幸福を追求するというストーリーは、時代の風潮に反しているようで感慨深い。

主人公のしず子は、主のみ足を髪でぬぐったマリアのように、人の嫌がる仕事を進んで行うことで人に奉仕し、それを自分の喜びとしていた。そして、それは彼女の父親も同じで、牧師を止め靴屋になることによって、主を身近に感じられないかと願う。しかし、父親は思想から行動を起こしたため、現実には飲み込まれるように志を挫き、心を閉ざしてしまいが、しず子は、父親とは対照的に仕事に喜びと価値を感じる。そのしず子を見せめ求婚する日高は、ブルジョア的で自分の価値観をしず子と分かち合おうとするが、あまりに苦勞知らずなためか、しず子の生活の困窮などに思いやることが出来ない。仕事に対しても、しず子の奉仕の精神が理解できず、父を亡くし結核を発病するしず子に対し、圧倒的優位な立場で自身の価値観を押しつけてくる。しかし、しず子は自身の生き方を貫くことにする。あくまで自分を生かしやりがいのある仕事によって幸福を掴もうとするのだ。

この時代、自分の価値観に従い、自身の幸福を見つけることこそが、尊い命ある日々にとって最も大切なこと、と言うメッセージがどれだけ受け止められたのだろうか。

そして、現代でもこの幸福の形のどれに、自分は社会は世界は、当てはまっているのだろうかと思うのである。